

CAMPUS HEALTH

2019.5

56 (2)

特集：発達障害
論文集



Japan University Health Association

目 次

巻頭言

巻頭言「生理学的状態を考慮した健康教育」……………	藤 井 義 博 ……	1
---------------------------	------------	---

特集 《発達障害》

【Ⅰ. 発達障害の現状】

増える発達障害を今後どのようにとらえ対応していくのか？	須 賀 英 道 ……	3
診断と治療の現状	藤 田 純 一ほか ……	11
発達障害の現状・支援体制 前編－就学前から高校まで－	濱 田 純 子ほか ……	17
発達障害の現状・支援体制 後編－大学生と社会人－	岩 崎 沙 耶 佳ほか ……	23

【Ⅱ. 大学における支援体制】

カウンセラーの立場から	吉 良 安 之 ……	29
精神科医の立場から	丸 田 伯 子 ……	35
看護師・保健師の立場から	長 沼 敦 子 ……	41
障がい学生支援室の立場から	楠 元 和 美ほか ……	47
関西学院大学における発達障がい学生の就労支援－大学と支援機関との連携・協働－	西 岡 崇 弘ほか ……	53

【Ⅲ. 今後の展望と対策】

修学支援に向けて、教職員ができること	小 川 さ や か ほか ……	58
修学支援に向けて、両親・家族が出来ること	伏 見 雅 人 ……	64
地方都市における地域連携型の障害学生就労支援	西 尾 彰 泰ほか ……	70

原著論文

肥満および脂質異常と生活習慣要因との関連－学生定期健康診断結果から－	長 澤 直 紀ほか ……	75
75g ブドウ糖負荷試験を用いた大分大学医学部5年生の糖代謝についての検討 (1)	加 隈 哲 也ほか ……	82
75g ブドウ糖負荷試験を用いた大分大学医学部5年生の糖代謝についての検討 (2)	加 隈 哲 也ほか ……	89
ダイエットに関する非機能的信念を測定する尺度の開発 －大学生を対象とした信頼性・妥当性の検証－	新 川 広 樹ほか ……	96
4種ウイルス感染症における抗体陽性率および感受性率の年次推移について －麻疹・風疹・ムンプス・水痘の血清抗体価解析－	渡 部 敏 恵ほか ……	104

医療系学生における流行性ウイルス感染症ワクチン接種と抗体獲得率	佐藤 弘 恵ほか	111
名古屋大学の学生アンケート調査による麻疹・風疹推定非感受性者率の推移	山本 明 子ほか	117
大学生におけるインフルエンザ感染の危険因子－I型アレルギー疾患の保有は感染リスクを増加させる	森 俊 明ほか	124
医学部・看護学部的女子学生におけるB型肝炎ワクチン接種後の獲得抗体価の推移	福島 敬 子ほか	130
若年アスリートの筋肉量と腎機能マーカーの解析	安田 修ほか	137
色覚多様性と就職－自分の身体について知っておく権利－	外ノ池 隆史ほか	143
月経関連症状緩和のための保健管理センターの取り組み 6年間の効用について	山口 志津子ほか	150
食品を提供する大学祭模擬店の衛生管理に関する学生の意識調査	市川 晶 子ほか	156
全国の大学における保健管理を担当する看護職の配置と職務に関する実態調査	砂川 昌 子ほか	163
大学生の自閉スペクトラム症傾向と被援助志向性と精神的健康との関連		
－メンタルヘルスリテラシーと感情コンピテンスを介した検討－	長田 有里子ほか	171
「こころの健康調査」からわかる心理支援を要する可能性が高い学生の心配事の特徴	山田 裕 子ほか	178
eラーニングによる自殺予防のためのメンタルヘルス・リテラシー教材の開発	高橋 あすみほか	185
学生相談室の利用が大学生の精神的健康に及ぼす効果－4年間の追跡調査による検討－	入江 智 也ほか	192
大学新入生の首尾一貫感覚（SOC）と生活習慣、精神的健康度との関連	佐々木 恵 理ほか	199
大学入学時の精神的健康度と休学・退学・留年状況の関連	堀田 亮ほか	205
工学部2年生以上におけるASD・ADHD関連の困り感－ASDの診断の有無による比較－	山崎 勇ほか	211
大学生に対する大規模集団CBT講義の効果－前向き縦断疫学研究－	足立 由 美	218
学生相談における困難事例である非主体的来談学生へのカウンセラーの理解と対応に関する全国調査	大町 知 久ほか	224
大学生の日常生活ストレスとストレスへの意識的・無意識的反応、ならびに精神的健康の関連	毛利 眞 紀	231

全国大学保健管理施設における留学生対応実態調査による今後の支援方法の明確化 第一報	石原可愛ほか	238
留学等で渡航する学生への健康管理に関する支援の状況についての全国調査	丸谷俊之ほか	244
障害を理由とする差別の解消に関して、国立大学がウェブに掲示しているテキストの解析	原田賢治ほか	250

報告

非医療系・非教育系学部学生に対する麻疹対策～在学生に対する調査経験を踏まえて～	工藤欣邦ほか	256
米国大学保健管理協会（ACHA2018）への参加報告—ACHA-JUHA ジョイントセッション （トラベルメディスン）を中心に—（国際連携委員会より）	山本眞由美ほか	261
George Washington University および American University の保健管理施設見学の報告 —国際連携委員会より—	山本眞由美ほか	268
機関誌編集委員会からのお知らせ		274
CAMPUS HEALTH (2) 投稿規定（投稿論文チェックリスト, 承諾確認書）		276
あとがき		279

生理学的状態を考慮した健康教育

藤女子大学保健センター長 藤井義博

学生の健康教育は大学保健センターの重要な役割のひとつである。その実現のために、通常はフィジカル・ヘルスとメンタル・ヘルスの二つの側面に分けてアプローチしている。これは心身二元論に基づき、分野ごとの診療方法の延長線上に健康教育を位置づけてきた歴史によると思われる。しかしながら黑白つけ難い生きにくさのスペクトラムを抱えている発達障害の学生の諸課題がクローズアップされてくるとともに、従来のきれぎれとしたアプローチ法の再検討が必要になってきているように思われる。そのためにはフィジカル・ヘルスとメンタル・ヘルスにまたがる心身医学的アプローチの再認識とともに、心身の架け橋として対象者の生理学的状態を考慮する新たな方法論が注目される。すなわち迷走神経を含む脳と体のコミュニケーションに関するポリヴェーガル理論である (Stephens W. Porges, 2011)。

脊椎動物は系統発生学において3段階にわたる自律神経の発達を経てきていることが、神経生理学的に明らかにされている。ひとつは系統発生学の初期の脊椎動物における無髄の迷走神経である。これは不動すなわち代謝・酸素要求・食物要求の減少による消極的な適応反応を可能にしている。脊椎動物が進化すると、硬骨魚類において交感神経系が出現し、それは魚群間のような動物群間における協調運動などの運動を支持している。そして交感神経系は闘うか逃げるか反応を含む代謝亢進を伴う積極的な動員による適応反応を行う。さらに人間を含む哺乳動物では有髄の迷走神経が発達している。この新しい迷走神経は、安心を感じることで、系統発生的により古い副交感神経系および交感神経系を積極的に抑制し、血管迷走神経性失神など不動による防衛反応および闘うか逃げるか (fight or flight) 反応を抑えて、自発的な社会的関わり行動の発現を可能にする。この有髄の迷走神経を制御している脳幹の領域は、顔面の表情筋と頭頸部の骨格筋を制御している脳幹の領域とリンクしている。この脳幹の領域は、中耳の耳小骨筋を介して人間の声を聞き取りやすくし、咽頭と喉頭の筋肉を通じて張りのある声を形成し、顔面を通じて感情と意図の表現力をつける。

社会的関わりの豊かな人々や観察力のある臨床家、教育者などが、よく観察して対象者の気持ちをわかることができるのは、哺乳動物で発達した新しい有髄の迷走神経の働きによる。一方、安心を感じることができない状況では、系統発生学上より古い自律神経反応が動員されることが知られている (ポリヴェーガル理論)。そのうちの不動による防御反応がいったん生じると、なかなかその悪循環から抜け出せないことも知られている。しかし安心を感じている人の生理学的状態すなわち自律神経系の状態から発せられるキューが、病んでいる人の意識状態を不安および防御状態の外に連れ出すことは、神経生理学的根拠がある。

発達障害、PTSDを含む種々の臨床上の障害では、新しい有髄の迷走神経が、より古い副交感神経系と交感神経系を積極的に抑制することで、不動の防御反応および闘うか逃げるか反応を抑えて、自発的な社会的関わり行動の発現を可能にする働きが、うまく連動的に発現していないことが知られて

いる。そうであれば、「空気が読めない」あるいは「人の気持ちがわからない」という判断は、脳の器質的障害や心理的あるいは精神的な障害に基づくものではなく、むしろ哺乳動物で発達している新しい迷走神経機能がうまく発現していないために安心を感じることができない意識状態に基づくものであると理解することができる。

安心を感じることは希望につながる。そして希望は、危険な状況あるいは生命を脅かす状況において、より古い自律神経による防御反応を伴わないで新しい迷走神経機能による脳と体のコミュニケーションを支援することを可能にする。なぜなら自分がしていることをひとたび理解できるなら、高次脳からのトップ・ダウンの規制に基づいたなんらかの変化があるからである。防御反応を伴わない脳と体のコミュニケーションを支援することは、学生の健康教育においても大切な神経生理学的機序に基づいた方策である。